「カルチャーパークあてるい」が地元奥州市と被災地の交流の舞台に「復興支援・地産地消フェスタ」開催

いわて生協

9月10日（土）、11日（日）、
岩手県奥州（おうしゅう）市のショッピングセンター
「カルチャーパークあてるい」で、
いわて生協による
「復興支援・地産地消フェスタ」が開催された。
被災地と奥州市のさまざまな企業が集まり、
交流を深めながら
地産品をアピールした2日間を取材した。

被災地と地元の50社が自慢の商品を披露

会場となったのは、「カルチャーパークあてるい」。いわて生協の店舗であるコープAteruiを中心に、衣料品店やスポーツ用品店などが集積する郊外型ショッピングセンターだ。

南北に並ぶ店舗の前にある1、400台分の大駐車場を会場に、今回集まったのは地元奥州市と被災地などからの約50社だ。それぞれが自慢の商品を提供し、ステージでのイベントとともに、2日間に訪れた延べ2万2、000人の人たちを楽しませた。

会場北側の「地元銘店ゾーン」では、奥州市を拠点とする23の企業や店が、麺類やおにぎり、みそ、果物などの販売を行なった。会場中央と南側の「被災地出店ゾーン」では、地震と津波で大きな被害を負った沿岸部の陸前高田市、大槌（おおつち）町、山田町、宮古市、岩泉町、久慈地域、大船渡市から25社が出店。海産物やその加工品、野菜や果物、酒、しょうゆ、銘菓など、定評のある商品の販売を行なった。

大船渡市から参加した鎌田水産㈱は、三陸沖で漁業を営み、海産物やその加工品の販売に携わる。この日は前日に水揚げされたばかりのサンマを1尾100円で販売。被災した沿岸部では漁船の9割が失われたといわれる

会場風景。施設名の「あてるい」は、平安時代の地元の英雄の名からとられている。

自宅を厨房に改装し、事業継続に挑む三陸味処三五十。

が、同社では数隻が残り、地元の産業復興の担い手として期待がかかる。

山田町から出店したのが三陸味処三五十。同社は2007年に設けた新店舗を今回の津波と火災で失い、事業継続の道を絶たれた。だが、自宅を厨房に改装して、テスト販売段階だった山田町産の海藻アカモクのつくだ煮を「山田のおみごと」として商品化に成功。この日は、大杉茂雄社長自らが販売の先頭に立った。

宮古市からは、いわて生協マリンコープDORAの職員、組合員による出店もあった。宮古コープ（地区）の理事、香木みき子さんは、震災当初からマリンコープDORAで物資交換の場を設けるなどボランティア活動を続けてきたが、この日はアワビの殻を加工したアクセサリーを販売。これは仮設住宅に住む被災者に呼びかけ、加工してもらったもので、被災者の収入につなげることも一つの目的だ。

アワビの貝殻アクセサリーを売る香木みき子さん。

フェスタ開催のため県や出展者と折衝してきた、いわて生協・産直事業推進事務局事務局長の森雄治さんは、「被災地の方は、『こうして人と会って話をすれば心が晴れるし、目標があれば頑張れる』とおっしゃいます。今回もそう思っていただければ」と、フェスタの意義について語る。

地元の伝統芸能などで少しでも元気になってほしい

会場西側には特設のステージが設けられ、奥州市と被災地の団体による演奏や演舞が繰り広げられた。

初日の午後に演じられたのが、沿岸部の釜石の団体による「釜石虎舞」だ。虎をかたどった着ぐるみを前後2人の人間が操り、舞台ばかりでなく客席にまで来て跳ね回る。「遊び虎」「跳ね虎」「笹喰み」と舞が進行するほど動きは激しくなり、その俊敏さと力強さに会場は魅了された。

全国大会で優勝し、若手民謡歌手として期待される宮古市の小田代直子さんは、自身、家を流されるなど被害に遭ったが、避難所を回って民謡で被災者を元気づけてきた。この日は、地元である宮古の民謡などを披露。最後に歌った「明日への虹…」は、「マリンコープDORA」の菅原則夫店長が代表を務める「復興プロジェクトかけあしの会」の協力でできた歌だ。菅原店長は、香木みき子さんと共に作詞にも関わっている。また、菅原店長は初日最後のステージにも姿を見せ、「復興支援チャリティーオークション」の司会では絶妙なトークで会場を沸かせた。

釜石の団体による「釜石虎舞」の力強さに会場は魅了された。

沿岸部ではすでに仮設住宅への移転は終わり、新しい生活が始まっている。その生活を支援するため、いわて生協の宅配（共同購入）では新たな組合員を増やしている。だが、地元の産業復興はまだまだこれから。仮設住宅での自立した生活を目指すも、失業給付が切れるなど不安材料は少なくない。

厳しい状況を乗り切るため、今まで以上に、被災地と各地とのつながりが求められている。

（文・写真　山本明文）

被災状況や現状の写真と併せ、いわて生協の復興支援活動の写真も展示された。